

セルゲル通りの雨

五木寛之

恋歌



五木寛之
作品集
12

恋 歌

文藝春秋

恋 歌

五木寛之作品集 12

1973年9月20日第1刷

著 者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製 本／大冢製本印刷株式会社

定価 470円

© 1973 Hiroyuki Itsuki Printed in Japan

0393-512120-7384

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第十二巻／目次

恋歌

セルゲル通りの雨

解説 巖谷大四

335 317 5

恋

歌

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル
カバー・表紙カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

恋

歌

（一九六七年十月十二日～六八年五月十一日新聞連載）

闇の中の白い脚

「いや、いいんだ」

信介は言葉をにごして、ふたたびシートに体を埋めた。いつもこうして通っているコースなのだ。運転手にまかせておけば、心配はない。深夜の京浜国道では、タクシーでさえも八十キロを越す速度で走っている。

井沢信介は、ちらと時計を眺めた。すでに午前零時を過ぎていた。

「冬子はまだ起きているだろう」

と信介は考えた。レコード会社という特殊な企業では、深夜の帰宅はめずらしいことではない。

だが、妻の冬子は、いつまでたっても、それに慣れなかった。信介がどんなにおそく帰っても、冬子は必ず起きて待っていた。

「十二時過ぎても帰らない時は、先に寝ていてくれ」

信介がそう言うのと、冬子は素直に目を伏せてうなずくのだった。だが、冬子はいつも信介を待っている。信介には、時にはそれが重荷に感じられる瞬間があった。

「子供でもいいね——」

と、信介は思う。深夜、茶の間に独りひっそりと坐つて、自分の帰りを待っている妻の姿を思い浮べると、氣

雨が降っていた。

午後から降り出した雨は、夜になってもやむ気配がなかった。

パイオニア・レコードの学芸部長、井沢信介は、車の中から道路に踊る雨脚を眺めていた。濡れて黒々と光る舗装道路が、ライトの中をかすめて過ぎる。その早さに、信介はふと不安を覚えて、体をおこした。

「田島君——」

「はい」

会社の運転手の中でも、一番若い田島が、快活な声で答えた。

「何でしょう、部長」

分が重いのだ。

冬子には、以前からそんな内側にこもる傾向があった。信介と結婚して数年の間は、それが少し変わったと思う。しかし、ある出来事のあと、彼女は再びさらに無口なひっそりとした女になった。

彼女は他人と接触することを好まず、信介と二人だけで生きて行こうと願っているように見えた。

だが信介には仕事があった。日々の激しい生存競争の中で、男は心身をすりへらして戦って行かねばならない。しかし――

井沢はポケットをさぐって、煙草の袋をとり出した。だが、その袋の中には、あいにく煙草は一本も残っていなかった。

「田島君」

「はい」

「すまんが煙草がきれた。一本わけてくれないか」

「どうぞ」

田島が片手をハンドルからはなした。シートの上から煙草の袋を取上げ、少し体をひねって井沢の方へさし出した。

井沢が前方に黒い人影を見たのは、その時だった。

「危ない！」

井沢が叫ぶより早く、急ブレーキの鋭い悲鳴があがった。ライトの中に、若い女の顔が浮び上り、鈍い衝撃が車体に響いた。

その瞬間、井沢信介は体がずっと冷くなるのを感じた。前の座席にぶつかった時、左肩を強く打っている。だが、その時は痛みを忘れていた。

へ人をひいた――」

そう思ったときから、井沢は精神の平衡を失っていた。夢中でドアを開けようとするが、うまくいかない。窓ごとに、白い横断歩道の標識が見えた。その端に、黒いシートを着た女が倒れている。折れ曲った洋傘が、かなり離れた場所に転がっていた。コートのすそから、白い女の脚が見えた。

「おい、何をしているんだ！」

と、井沢は大声をあげて運転台の田島の肩をこづいた。

「早く！」

田島がそのとき何と答えたか、井沢にははっきり聞きとれなかった。だが彼は確に何か言ったような気もする。

「早くやれ！」

と、井沢は手を振った。一刻も早く車を道路の端によせて、被害者を助けなければならぬ。このままでは、第二第三の事故の原因になる、と、とっさに判断したのである。

「はあ」

と田島は喉につかえたような声で答えた。若い運転手はその時、すっかり逆上していたらしい。

「おい！ どこへ行くんだ！」

井沢が驚いて叫んだとき、車はタイヤをスリップさせながら猛烈な勢いで走り出していた。

一瞬の間、井沢には運転手が何をしようとしているのか、判断がつかなかった。

「急げ！」

と、井沢は叫んだ。彼は運転手が、車を適当な場所へ持って行くとうとしているのだと考えていた。

だが、彼を乗せた乗用車は、雨のしぶく京浜国道を、唸りをあげて疾走していた。

振り返ると、雨ににじんだ横断歩道は、すでに闇の中に溶けこんで見えなくなっている。

「とめろ！ どこへ行く気だ！」

と、井沢は叫んだ。

「え？」

田島が運転台から振り返った。若い小さな運転手の顔は、ルームライトの光でもそれとわかるほど蒼ざめていた。

「とめるんですか？ 逃げるんじゃないんですか？」

「馬鹿！」

井沢は田島の肩を掴んで言った。

「すぐにもどるんだ。被害者を病院に運んで手当をしなければならぬ。人身事故だぞ」

「だって部長が——」

「おれが何だ？」

「どうしますかときいたら、早くやれ、と——」

井沢の頭の中がかっと熱くなった。彼は目の前の若い運転手の首の骨を、へし折ってやりたいと思った。被害者の処置を急げ、と言ったつもりの言葉を、そんなふうを受取ることでできる青年の無神経さに激しい怒りをおぼえたのだった。

「もどるのはまずいですよ」

と、田島が目を光らせて言った。

「このまま逃げてしまえば、大丈夫だと思いますがねえ」

井沢の顔が一瞬、暗く翳った。

「部長——」

田島が言った。喉に何かつまったような、かすれた声だった。

「大丈夫ですよ。通行人も、ほかの車も見あたりなかったし、それに大したショックじゃなかったです。かすって転んだだけです。このまま行ってしまえば、それで済みます。そうしましょう」

「車を回し給え」

と、井沢信介が言った。低い声だったが、その声には断乎とした強いひびきがあった。

若い運転手は、ブレーキを踏んで車をとめた。

「どうするんです？」

「Uターンして今の場所にもどるんだ。早くやれ」

田島はおびえた顔を曲げて、背後を眺めた。近づく車のないのを見さだめて、大きくハンドルを切る。タイヤがきしんだ。

「急ぐんだ」

信介は前方にひろがるアスファルト道路の黒い帯を、目をこらしてみつめた。雨がフロント・グラスに白く碎けた。

へあの信号のあたりだ——

白い横断歩道の標識が見えた。

「ここだったかな」

田島がスピードをおとした。窓ガラスを掌でぬぐいながら、

「いませんよ、部長」

「いない？」

あ、と田島が声をあげて、道路の端を指さした。

そこには、さっき見た、折れ曲った洋傘が雨にうたれて転がっている。

「そのへんにとめてくれ」

井沢は田島に命じて、車をとめさせた。ドアを開けると、信介は激しい雨の中へ降りて行った。

だが、その横断歩道のあたりには、人影はなかった。

「やっぱりそうでしょう、ね」

田島が上衣を頭からかぶってやって来て言った。

「大した怪我じゃなかったんですよ。それで自分で帰ったんだ。きっとそうですよ」

信介は無言で折れ曲った洋傘を拾いあげた。折りたたみ式の女持ちの傘だった。

へおそかった——

と、彼は考えていた。若い運転手が逆上して走り出したときから、恐く十分近くたっている。たぶん、その間に通りかかった車が、倒れている被害者を発見して病院へ運んで行ったのかもしれない。

「どうします？」

と、田島がかすれた声で言った。彼は泣きべそをかいている少年のように見えた。

「警察へ行くんだ」

井沢信介は言った。

「これから行って、ありのままに事情を話そう」

その時、田島の目が不意に敵意にみちて井沢をみつめた。

「いいですよ。でも、早くやれと私に言ったのは部長ですからね。私は警察でそう言いますよ」

「何を言うんだ！」

信介の頭の中に突然、大きな見出しの新聞記事が浮び上った。

ヘレコード会社学芸部長ひき逃げのち、自首——

「二人が黙ってさえいれば、知れませんよ。ね、そうしましょう」

田島が囁いた。西の空で青い稲妻が光った。

その夜、冬子は夫の帰宅を待ちながら、茶の間でテレビの深夜劇場を見ていた。

昔から出不精だったのだが、最近はことにその傾向が強まって来ている。

映画を見に街へ出ることなども、ほとんどなかった。夫婦二人きりの家庭では、家事もそれほど負担にはならない。ひまができる、冬子は本を読むか、ぼんやりテレビを見るかしてすごしていた。

夫の信介は、レコード会社という特殊な社会で働いているため、帰宅はいつも深夜になる。

信介は温厚な夫であり、経済的にも安定した立場だった。この二十年ちかく、夫が大声をあげたのを冬子は見たことがない。

「姉さんのところはいいわ。旦那様ができたかたで——」

と、妹の秋子は顔を合わすたびに言うのだった。

「でも、子供がいけないのは淋しいわねえ」

そんなふうに言われると、冬子は反射的に体がすくむような気がした。子供ができないのではなく、夫の信介と暗黙のうちに作らないように気をくばっているのだ。

冬子はやがて四十七歳になる。二十歳で結婚して、すぐに郷里の信州をはなれ、満州のハルビンに渡っている。当時の信介は、長野の師範学校を卒業したばかりの、若々しい青年教師だった。

アカシアの花が美しい異国の都会で、彼らは四年間をすごした。その時代が二人にとっての、最も平和な季節だったと言えるだろう。

やがて敗戦とともに、二人は難民として満州を脱出し、昭和二十二年の夏、ようやく内地に引揚げて来た。

信介は教師をやめ、冬子の妹の主人である森三郎の世話で、今のレコード会社に勤めたのである。

その時から二十年たっていた。井沢信介は今、わが国でも一流のバイオニア・レコードの学芸部長として、安定した地位についていた。かつて教育畑で働いたという

経歴が、学芸部の仕事に向いていたのかも知れない。

信介と冬子は、都内でも高級住宅地に属する池上本門寺の付近に住み、平穏な日々を送っていた。妹の秋子が言うように、それは幸せな夫婦といってもよかつただろう。

だが、信介と冬子の間には、いつの間にか得体の知れない深い亀裂がよこたわっていた。

最近はお争いさえほとんどしたことがない。それでいて、他人には、うかがい知れない冷え冷えとしたものが、二人の間にはあった。

それが何なのか、なぜそうなったのかを二人は知っていた。

二十二年前に、彼ら二人の間におこったある事件の記憶が、夫婦の気持を凍らせているのだった。

いま、テレビの深夜番組を見ながらも、冬子はそのことを考えていた。独りでいると、いつもそうなってしまう。雨の音にまじって、自動車が家の前に止る音がした。信介が帰って来た、と冬子は思った。

「まあ」

玄関をはいって来た信介を見て冬子は思わず驚きの声

をあげた。

「どうなさったの？ 車でいらしたんでしょ」

「うむ。ちょっと途中で——」

介はあいまいに言葉をにごすと、

「バスタオルをくれ」

「はい」

上衣からズボンまでぐっしり濡れている。白いもののまじった髪が乱れて、額にかかっているのを、冬子は眉をひそめて眺めた。

万事につけ慎重な夫なのだ。お洒落というのではないが、身だしなみには気をつかうたちである。

「あれでもう少しおふとりになると、俳優のSにそっくりですわ」

などとき手伝いに来る家政婦が言ったりする。

「そうかしら」

そんな時、冬子は苦笑しながら家庭の主婦に人気があるという中年の性格俳優と、夫の顔を重ねてみて、

「へやはりちがう——」

と思うのだった。

信介には、もっとどこか乾いた鬚りのようなものがある。

る。ホームドラマの父親を演じたりする、そのSという

俳優には、それがない。ただ、どこか知的な表情と、ゆったりした身のこなしに共通のものはあった。地味な洋服を渋く着こなしている点も似ている。

だが、今夜の夫には、どこか異常な感じがあった。それはこれまで冬子が知らないものだった。

「悪酔いなすったの？」

「いや」

信介は短く言い捨てると、濡れた上衣を脱ぎ捨てて部屋に上った。

「お風呂は？」

「いい」

茶の間に腰をおろすと、信介はポケットをさぐって顔をしかめた。

「煙草ですか？」

信介はなぜかはっと顔をあげて冬子を見た。

「何かあったにちがいない」

冬子は長年つれそった妻の直感で、そう思った。

「あなた——」

「なんだ」

信介がじっと冬子を見つめた。その目の色には、冬子の立ち入るのを拒む、奇妙ないらだちがあった。冬子は今夜、何があったかをきくのをやめた。

おそらくそれは自分に触れられたくない何かにちがいない、そんな気がしたのであった。

「すぐにおやすみになりますか」

「そうしよう。疲れた——」

信介が次の間の寝室に姿を消すと、冬子は玄関にもどった。濡れた靴をぬぐい、新聞紙をつめて棚においた。

脱ぎ捨てられた背広の上衣を抱えて茶の間へもどりかけて、

「あら——」

と冬子は立ちどまった。さっき信介を迎えた時は気づかなかったのだが、玄関のすみに、たんだ洋傘がある。ひどくねじ曲って、骨がばらばらになっていた。それは冬子の見覚えのない、女持ちの傘だった。なぜか得体の知れない胸騒ぎを覚えて、冬子は立ちすくんだ。

飛行機の爆音がきこえた。

それは少しずつ大きくなり、頭の上を通って、やがて

きこえなくなった。外国へむけて、羽田の国際空港を離陸した旅客機だろう。

闇の中で、隣に寝ている夫の信介の、寝返りをうつ気配があった。

「眠れませんか？」

「なんだ。おまえも起きていたのか」

信介はなぜか少しあわてたように言い、

「雨はやんだらしいな」

「ええ」

闇の中で夫は何を考えていたのだろう、と冬子は思った。冬子自身は、あの女持ちの傘のことを考えていたのだった。それは、あきらかに若い娘の持つ傘だった。

しかし、冬子の心にわだかまっているのは、夫が若い女持ちの傘を持って帰って来たことではなかった。

彼女の気にかかっているのは、その傘の異様な破損のしようなのである。どんな強い力を加えられたものか、そのプラスチックの柄は無惨に半分ほど砕けていた。そして、傘全体が何かにしごかれたようにねじ曲っていたのだ。

へそれに——